

茂田一義君追悼

八木 健彦

さる5月に長年の親友であり、同志であった茂田一義君が逝ってしまった。5月というのは、君の好きな季節であったが、君との在りし日を思い返すとき、居たたまれないほどの懐かしさとともに、ある苦さを感じざるを得ない。この苦さは、君に対する、私の負いといふことにあるのだが。

君は晩年ずっと律儀に、年賀状を寄越してくれた。それは儀礼的な挨拶というものではなく、いつも過去から今後へと及ぶ、君の生き方と闘いについて、熱い思いと凜とした決意を、びっしりとしたためたものであった。その中で、いかにも君の情念を表わす君らしい言葉として、私の胸に響いているのが、「終世1人の修羅として生き、戦い抜く」というものであった。そうだ。君は休むことなく、怯むことなく、安住することなく、勝利者として、陽のある所に出ることも絶対になく、阿修羅として生き、戦い抜いたのだ。私は君の年賀状を読みながら、自らの行為としてそれに応じなければと考え、またそうしてきつたりであった。

私はここで君への負いを返しておかねば…しかし今となってはそれが、どれ程の意味を持つのか、その懷疑を抱えつつはあるが。それは君が折にふれ言及している、67年の「7.6」後の、赤軍派結成への私の参加についてである。私は結局、この件については、自分の本心を語らず沈黙を守り続け、君と共にいたところから、立ち去ってしまった。それが君に、どんなに大きな衝撃と、苦しみをもたらすかについて、私は全く思いが至らなかつた。

君の言葉によれば、私は当時、小ブルジョワ・インテリゲンチャの急進主義の、情勢への危機意識と、自分が積み残してきた思想的行き詰まり、思想的危機の相乗の中で、あがきもがいていました。そしてその出口を見出しえぬまま、自己解体か自己保身かの選択に追い込まれながら、赤軍派への自爆的参加と、自爆的闘いによって、望月君の死に殉ずる他に道はないと、覚悟したのでした。こんな選択をどうして君に、勧めることができただろうか。それは自分の心の内にのみ、秘しておくべきものと思われた。だから君には、些かも私の後追いすることなく、労働者革命家の同志たちとともに、まったく違った道へ踏み出し、私の自爆を見届け、それを糧にしてもらいたい、という想いでいました。だから、こんなにも寂しく辛い思いを、君に話すことが出来なかつたのです。だから70年に君の“面接”を何度か受け、「果たすべき革命運動の任務から自分が取り残され、立ち遅れているのではないか」という想いで、全てを捨て去って、君が上京したと知ったとき、私は

どんなに驚き、「何と馬鹿なことを！」と思ったことか。しかし残念さと同時に、自分と同じ“何か”を、君も共有していることがわかり、嬉しく感ずる。そんな矛盾した思いがあつたことも事実です。その後に、君が苦しんだ悔恨と、懲愧の念を、私もまた獄中で共有していたのです。そういう連帯感もあつたのです。

本当は、障礙者解放運動での君の生まれ変わりこそ、共有すべきものだったのかも知れない。その点では、君にお叱りを受けることは、覚悟しています。それにしても東京拘置所へ、福島の中手聖一さんが、面会に来ておられたとは、本当に驚きです。

最後に、連れ合いの喜子さんの、ご苦労と献身には、ただただ頭が下がる思いである。67～68年頃、しばしば君の自宅に転がり込み、家族同様のお世話を受けていました。勿論、自分たちの運動の未熟さゆえに、計り知れない苦労をかけ、その尻拭いをさせてしまったことが、一番の申し訳ないことである。喜子さんこそが、「灰の底深く燐然たるダイヤmond」であった。この茂田ののろけは、悔しいけど認めざるをえない。

